

「教育の成果・効果」に係る自己点検・評価書

基準4-1：専門職学位課程の人材養成の目的及び修得すべき知識・能力に照らして、教育の成果や効果が上がっていること。

(1) 観点・指標ごとの分析

観点4-1-①：単位修得、修了の状況、資格取得の状況等から判断して、専門職学位課程の目的に照らした教育の成果や効果が上がっているか。

(観点・指標に係る状況)

平成22～24年度の単位修得状況は99.8～100%であり、その成績もS評価とA評価が99.7～100%（資料4-1-①参照）を占めている。

平成23年度に実施した「学生による授業評価アンケート」の結果では、「臨床共通科目」全体についての設問のうち、本学教職大学院の目的である「「即応力」「臨床力」「協働力」を付けることができたか」の質問に対し、「5 はい」から「1 いいえ」までの5段階の回答の平均値がそれぞれ、3.7、4.1、4.1であり、「総合的に満足しているか」の質問に対しては、4.1であった。また、「プロフェッショナル科目」全体では、「授業内容は整理されているか」、「難易度は適切か」、「興味深い授業内容か」、「総合的に満足しているか」の質問に対し、それぞれ、4.6、4.6、4.8、4.8であった。さらに、「学校支援プロジェクト」関連科目についてのアンケート結果では、「「即応力」「臨床力」「協働力」を付けることができたか」の質問に対し、それぞれ、4.1、4.0、4.3であり、「総合的に満足しているか」の質問に対しては、4.1であった。（別添資料4-1-①-1「平成23年度授業に関するアンケート結果」参照）

「学校支援プロジェクト」を構成する「学校支援フィールドワーク」、「学校支援リフレクション」、「学校支援プレゼンテーション」については、学校現場から高い評価を受けており、様々なプレゼンテーションの機会においても外部から高い評価を得ている。（別添資料4-1-①-2「第2回学校支援プロジェクト連絡会（学校支援プロジェクトに伴う意見集約）」参照）

また、「学校支援プレゼンテーション」については、得られた成果を共有するため、連携協力校に対してのみ行うのではなく、地域の教育委員会関係者にも公表し評価を受ける「学校支援プロジェクトセミナー」としてチームごとに発表を行っており、参加した教育委員会関係者や学校現場から高い評価を受けている。

平成22～24年度の修了の状況は、修了判定対象者全員が学修成果の総合的な審査で「合」と判定され修了しており、アドバイザーの「学修成果報告書に関する所見」によれば、評価も高いレベルにある。

資料4-1-① 単位修得状況（平成22～24年度）

区分		平成22年度		平成23年度		平成24年度	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率
評価	S	976	92.5%	848	95.3%	1087	97.0%
	A	76	7.2%	41	4.6%	34	3.0%
	B	3	0.3%	1	0.1%	0	0.0%

	C	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
	計	1055	100.0%	890	100.0%	1121	100.0%
	D	0	0.0%	0	0.0%	2	0.2%

**(観点の達成状況についての自己評価：A)**

平成22～24年度の単位修得状況は99.8～100%であり、その成績もS評価とA評価が99.7～100%を占めている。平成23年度に実施した「学生による授業評価アンケート」の結果では、「臨床共通科目」全体及び「プロフェッショナル科目」全体、「学校支援プロジェクト」関連科目について、高い評価を得ている。

また、「学校支援プレゼンテーション」については、連携協力校に対してのみ行うのではなく、地域の教育関係者にも公表し評価を受ける「学校支援プロジェクトセミナー」として発表を行っており、参加した教育委員会関係者や学校現場から「学校支援プロジェクト」全体に対して高い評価を受けている。

平成22～24年度の修了の状況は、修了判定対象者全員が学修成果の総合的な審査で「合」と判定され修了しており、アドバイザーの「学修成果報告書に関する所見」によれば、評価も高いレベルにある。

以上のことから、観点4-1-①を十分に達成していると判断する。

**観点4-1-②：学生や修了生の教育成果・効果の全般についての概要が把握できているか。**

**(観点・指標に係る状況)**

学生については、2年間の学修成果を「学修成果報告書」にまとめることになっており、作成においては、学生自身が学修プロセスを振り返り、「修得した科目と学びの概要」、「専門職学位課程における学び全体の振り返り」について考察している。そして、学修を振り返り、意味づけしたものを発表する「学修成果発表会」を毎年1月中旬に実施している。また、「学校支援プロジェクト」においては、「e-box」というデジタルポートフォリオが残されており、随時、教員も含めて学生が相互に閲覧できるようになっている。また、「学校支援フィールドワーク報告書」を毎年度提出させており、実習部分の学習状況を1年ごとに確認できる体制になっている。

修了生については、年に1回、7月下旬に「上越教育大学教職大学院フォローアップ研修会」を実施し、本学教職大学院の教育効果の検証を継続的に行っている。また、アドバイザーが修了生の赴任先を訪問した際の学校長や修了生との面談などからも教育成果・効果について把握している。

**(観点の達成状況についての自己評価：A)**

学生については、「学修成果報告書」や「e-box」というデジタルポートフォリオ、「学校支援フィールドワーク報告書」によって、教育成果・効果について把握している。修了生については、「上越教育大学教職大学院フォローアップ研修会」やアドバイザーによる修了生の赴任先訪問等を通して、教育成果・効果について把握している。

以上のことから、観点4-1-②を十分に達成していると判断する。

**観点4-1-③：修了生の修了後の進路状況等の実績や成果から判断して、専門職学位課程の目的に照らし**

た教育の成果や効果が上がっているか。

(観点・指標に係る状況)

平成24年度修了生の現職教員学生33人を除く学部卒学生17人のうち、7人が公立学校教員として採用、他の8人が公立学校の臨時教員として採用されている(資料4-1-②参照)。その他の2人については、就職活動中が1人、教員採用試験受験勉強中が1人である。

資料4-1-② 教員就職状況内訳(平成25年7月1日現在)

区分	正 規	臨 時	計	修了生
平成24年度	7(41.2%)	8(47.1%)	15(88.3%)	17人

区 分	教 員 就 職 者							企業・ 官公庁	進学者	その他 (未就職 等)	合 計
	小学校	中学校	高等学校	幼稚園	特別支援 学校	大学等	計				
平成24年度	10(6)	5(2)	0	0	0	0	15(8)	0	0	2	17

(注) ( )内は、育児休業、病休、産休教員の代替教員等、1年以内の期限付き教員で内数。

(観点の達成状況についての自己評価：A)

現職教員学生33人を除く学部卒学生17人の進路状況は、受験等勉強中の2名を除き、いずれも公立学校教員等の職に従事しており、教育の成果が十分に上がっている。

以上のことから、観点4-1-③を十分に達成していると判断する。

観点4-1-④：学修の成果を示す課題研究等の内容が、専門職学位課程の目的に照らした内容になっているか。

(観点・指標に係る状況)

学修の成果は、「学修成果報告書」にまとめられ、学修成果審査委員会によって審査が行われることとなっている。この「学修成果報告書」には、「修得した科目と学びの概要」、「専門職学位課程における学び全体の振り返り」がまとめられる。「修得した科目と学びの概要」では、「臨床共通科目」、「プロフェッショナル科目」、学校支援プロジェクト関連科目の修得単位数の他、それぞれの科目での学修を振り返りまとめている。「専門職学位課程における学び全体の振り返り」では、2年間の学修全般を振り返り考察する。この他、自分の興味・関心からテーマを決めて追究した研究報告も添付されている。研究報告の内容は、教科教育、学級経営、小中一貫教育、人権教育、特別支援教育、校内研修等、様々であるが、学校支援プロジェクトの連携協力校での実習をもとに探究を進めたり、連携協力校以外の学校にも対象を広げて探究したりしている。

テーマについては、「高度の専門的能力と優れた資質を有する教員の養成」「理論と実践の融合」を目指すという趣旨に応じたものとなるよう、各アドバイザーが随時指導を行っている。

(観点の達成状況についての自己評価：A)

学修の成果は、「学修成果報告書」にまとめられ、「修得した科目と学びの概要」、「専門職学位課程における学び全体の振り返り」について記述されるようになっている。この他、自分の興味・関心からテーマを決めて追究した研究報告もまとめられ添付される。個人の興味・関心からの研究ではあるが、学校支援プロジェクトの連携協力校での実習をもとにした探究であったり、各アドバイザーの指導があったりするため、本学教職大学院の趣旨に応じたテーマとなっている。

以上のことから、観点4-1-④を十分に達成していると判断する。

(2) 長所として特記すべき事項

該当なし

基準4-2：専門職学位課程における学生個人の成長及び人材の育成を通じて、その成果が学校・地域に還元できていること。

(1) 観点・指標ごとの分析

観点4-2-①：修了生の赴任先の学校関係者・教育委員会等からの意見聴取等の結果から判断して、専門職学位課程の目的に照らした教育の成果や効果が上がっているか。

(観点・指標に係る状況)

平成22年度に設置した「新潟県教育委員会及び新潟市教育委員会との連携推進協議会」や、教職大学院設置前から毎年実施している「都道府県教育委員会と上越教育大学との情報交換会」(別添資料4-2-①-1「平成23年度都道府県教育委員会と上越教育大学との情報交換会」における大学院カリキュラムについての意見聴取結果の分析参照)を始め、教職大学院説明会で訪れる教育委員会等で、修了生の評価について情報を収集している。

また、アドバイザーが修了生の赴任先を訪問した際の学校長との面談において、具体的な学校課題解決に向けての貢献内容について聞き取りを行っている。さらに、「学校支援プロジェクトセミナー」、「学校支援プロジェクト連絡会」等においても、学校関係者や教育委員会から意見聴取を行っている。ここでは、ミドルリーダーとして学年経営や校内研修、生徒指導等に手腕を発揮したり、学級担任として優れた教育実践を行っていたり、新卒ではあるが、授業実践や学級経営に力を発揮している等の評価を受けている。

(観点の達成状況についての自己評価：A)

新潟県教育委員会を始め、各教育委員会や、修了生の赴任先の学校長等の意見聴取から、ミドルリーダー、学級担任、新採用教員等、それぞれの役割に応じて学校課題の解決に取り組んでいることをとらえた。これは、教職大学院のコンセプトとしている「即応力」「臨床力」「協働力」が具現化された姿であり、教育の成果が上がっている。

以上のことから、観点4-2-①を十分に達成していると判断する。

観点4-2-②：修了生が、赴任先等での教育研究活動や教育実践課題解決等に貢献できているか。

(観点・指標に係る状況)

「新潟県教育委員会及び新潟市教育委員会との連携推進協議会」や「都道府県教育委員会との懇談会」をはじめ、教職大学院説明会で訪れる教育委員会等で得た情報から、ミドルリーダー、学級担任、新採用教員等、それぞれの役割に応じて学校課題の解決に取り組んでいることがうかがえる。また、修了生が「学校支援プロジェクト」の連携協力校において、受け入れ担当者として学生と協働して学校課題の解決に当たっている事例もある。さらには、指導主事や教頭、主幹教諭、指導教諭として、教職員の指導にあたっている修了生も出始めている。(別添資料4-2-②-1「第3回フォローアップ研修会報告書」参照)

(観点的達成状況についての自己評価：A)

「新潟県教育委員会及び新潟市教育委員会との連携推進協議会」や「都道府県教育委員会との懇談会」をはじめ、教職大学院説明会で訪れる教育委員会等で得た情報から、それぞれの立場や役割に応じて教育研究活動や教育実践課題の解決に取り組んでいることがうかがえる。また、修了生が、「学校支援プロジェクト」を受け入れる連携協力校の担当者として、学生と協働して学校課題の解決に当たっている事例や、指導主事や教頭等として、教職員の指導に当たっている修了生もいる。以上のことから、観点4-2-②を十分に達成していると判断する。

観点4-2-③：修了生が、短期的な観点及び数年を経た長期的な観点から見て、成果があったと振り返ることができているか。

(観点・指標に係る状況)

平成22度から年に1回、7月下旬に「上越教育大学教職大学院フォローアップ研修会」を実施している。目的は、「本学教職大学院の教育効果の検証を継続的に行い、本学教職大学院の質の向上を図るとともに、関係機関との連携等における修了生への支援の在り方を探る」、「修了生・現役院生・教職大学院教員が相互に情報交換を行い、これまでの学修の振り返りを行う」ことである。内容は年度ごとに多少の違いはあるが、修了生の基調発表、修了生をシンポジストに含めたシンポジウム、講演、修了生と学生混成でのグループ協議などである。平成24年7月に実施した「上越教育大学教職大学院フォローアップ研修会」では、2名の修了生が「現在の仕事から見た教職大学院の学び」、「教職大学院の学びを振り返って」というテーマで発表し、「学校支援プロジェクト」において、チームで教育活動の改善に取り組む際の方途を実践的に身に付けることができた」、「個人研究では経験しにくいチームでの実践は、現在の学校の教育活動に生きている」、「自分の思考の根拠が増え、多面的に物事を判断するようになった」等、教職大学院での学修の成果を語った。(別添資料4-2-②-1「第3回フォローアップ研修会報告書」参照)なお、参加者アンケートやグループ協議の中でも「いろいろな領域での学びが現在の困ったときの選択肢になっている」、「学校支援プロジェクト」での人と人とのかわりについて学んだこと、他チームから学んだことが現場でいきている」等の成果についても述べられていた。

また、平成23年度に現職教員修了予定者対象に実施した「教育の成果・効果に関する調査」の結果からも、教職大学院のカリキュラムが今日の教育現場で直面する課題に対応するカリキュラムであったと評価されている。(別添資料4-2-③-1「平成23年度「教育の成果・効果に関する調査」(現職教員修了

**予定者対象) 結果の分析」参照)**

さらに、アドバイザーが修了生の赴任先を訪問した際の修了生との面談などでも、教職大学院での学修が現在の教育活動に役立っているという声を聞いている。

**(観点の達成状況についての自己評価：A)**

「上越教育大学教職大学院フォローアップ研修会」における修了生の発表やアンケート、協議の内容では、教職大学院の学びが現在の教育活動に生きているととらえている修了生が多い。また、修了予定者へのアンケートから、教職大学院のカリキュラムが今日の教育現場で直面する課題に対応するカリキュラムであったと評価されており、修了生の赴任先を訪問した際の修了生との面談などでも、教職大学院の学修が現在の教育活動に役立っているという声を聞いている。

以上のことから、観点4-2-③を十分に達成していると判断する。

**(2) 長所として特記すべき事項**

平成22年度から「上越教育大学教職大学院フォローアップ研修会」を実施し、今年度7月で第4回となる。この研修会は、教育効果の検証を継続的に行うことが目的の一つとなっており、修了生が教職大学院での学修をどのように意味づけているかを、直接聞き取れる貴重な機会となっている。なお、年度末には「拓け！教師教育新時代」という報告書を作成し、修了生等に配付している。